



虹 にじ

No.6

平成19.3.1発行

墨田区男女共同参画情報誌

特集
大切に育てたい
「子どもの個性」



一人ひとりの
可能性は無限大！



墨田区男女共同参画社会情報誌『にじ』は女性も男性も共に輝く社会へのかけはしになることを願って名付けられました。

CONTENTS

巻頭インタビュー
山本一力さん 2P

特集
大切に育てたい「子どもの個性」
一人ひとりの可能性は無限大！ 4P

区民レポート
可能性を生かせる環境づくり 6P

インフォメーション 8P

墨田さんちの男女共同参画物語
さくら、あこがれの
大学生活がスタート 10P

私らしく輝いて
家庭福祉員 横田俊子さん 12P

山本一力さん

小説家

江戸時代の長屋に暮らす町民たちを描いた数々の作品で時代小説ファンの心をつかんだ山本一力さん。
49歳で作家デビュー、53歳で直木賞を受賞した山本さんの作品を支えたのは、江戸情緒の残る下町で暮らした経験でした。そのときに感じた下町文化の魅力を語っていただきました。



49歳で小説家になられた
きっかけを教えてください。

12年前、経営していた会社が倒産して、大きな債務を背負ってしまいました。それをどうやって返そうかと考えたのですが、なにしろ億単位のお金ですから、普通の仕事をやっていたら一生かかっても返しきれません。そこで、物書きになろうと考えたのです。

それまで私は、旅行会社の添乗員、広告代理店の営業やデザイン事務所経営など、さまざまな仕事をしてきましたが、小説家をめざしたことはなく、小説を書いたこともありませんでした。しかし、なにしろ他に借金を返す方法がないのですから、「やるしかない」と決意したのです。本気で決めたら、悩んでいる暇などありません。待っていてくれる家族のためにも、必死で取り組みました。

しかし、そう簡単に小説家になれるものではありませんでした。さまざまな文学賞に応募しては落選する日々が、3年ほど続きました。

東京の下町に住んだことが、
江戸時代を舞台にした小説に
役立ったそうですが？

ちょうどその頃、富岡八幡宮の近所に住んでいたのですが、この環境が小説を

誰もが心地良く暮らせる地域には、 人と人との「ほどよい距離感」が大切です

書く上でとても重要な要素となりました。

私は、もともと時代小説が好きで、この頃から江戸を舞台にした時代小説を書いています。時代小説は、その時代の空気をリアルに表現できるかどうかが重要だと思っています。そのため、私は大量の資料を集めて時代考証に努めています。しかし、そうやって頭の中で作り上げた小説には、本当に必要なものが欠けていることを、歴史ある富岡八幡宮が教えてくれたのです。

書くことに行き詰まると、よく富岡八幡宮に散歩に行きました。境内の玉砂利の感触を味わいながら歩いていると、とてもいい気持ちになります。そんなとき「ああ、江戸時代の人も同じようにここを歩いたのだ」という実感が湧いてくるのです。それは、どれほど多くの資料を読んでも得られない、リアルな時代感覚です。

この感覚が、私の小説に江戸の生き生きとした空気を吹き込んだのだと思います。そのおかげで、97年、オール讀物新人賞を受賞し、小説家デビューを果たすことができました。

江戸情緒が残る下町には、

どんな魅力があるのでしょうか？

墨田区もまさにそうだと思いますが、東京の下町と呼ばれる地域には、江戸時代の長屋文化を受け継ぐ雰囲気があります。江戸時代の長屋といえば、狭い家同士が薄い壁一枚のみで仕切られているので、近所同士はお互いに何もかも知り尽くしているといえます。そのため、近所づきあいは遠慮がなく、勝手に家に入り込んでくる、というイメージを持っている人もいます。

しかし、それは誤解です。筒抜けだからこそ、よその家のことは聞こえないふりをする。垣根がないからこそ、相手がいいと言わなければ入っていかない。そういう暗黙のルールが、9尺2間の一部屋長屋にはあったのです。それが、東京の下町には現代も生きていくというのが、私の実感です。

実際、私が住んでいた町の人たちは、頼めば何でもしてくれるけれど、そうでなければ放っておいてくれるという、非常にありがたい存在でした。5年前に直

木賞を受賞したとき、有名な賞をとった

ということで、急にさまざまな人が親しげに近寄ってきました。しかし、町内の人たちはみんな、お祝いをしてくれたものの、今までどおりのつきあい方を保ってくれたのです。うれしかったですね。

誰もが暮らしやすい 地域づくりの秘けつは 何でしょうか？

最近、人と人との「ほどよい距離」がわからない人が増えているように思います。上手に距離をとれば心地良い関係を保っていられるのに、それがわからず、一気に近づこうとするからトラブルが起るのです。

本来、ほどよい距離感は自然と身につくものです。しかし残念ながら、今はそういう環境にはありません。昔の長屋とは違い、今は外界を完全に遮断する住まいですから、他人の存在を意識することもありません。そのため、人を思いやる感覚が鈍くなり、ほどよい距離感がわからなくなっているのです。よくレストランなどで周囲の迷惑もかえりみず、大声で話している家族連れをみかけますが、

典型的な例ではないでしょうか。

しかし、住宅事情は変わっても、下町にはお祭りなど、地域の人たちと交流する機会がまだまだ残っています。私の子どもたちも、近所づきあいの中からたくさんのお話を学ばせてもらっています。

人と人とのほどよい関係が必要なのは、近所づきあいに限りません。夫婦の関係、親子の関係など、お互いの個性や生き方を尊重しあうことが大切です。

親密でありながらほどよい距離を保って交流している地域は、非常に成熟した社会だと思っています。下町に今も残る近所づきあいの秘けつを、これからの地域社会に生かしていきたいものです。

プロフィール やまもと・いちりき

1948年高知県生まれ。都立世田谷工業高校電子科卒業。1997年、「蒼龍」が第77回オール讀物新人賞受賞。2002年、「あかね空」が第126回直木賞受賞。以降、江戸市井ものをはじめとする時代小説の旗手として、多数の作品を発表。最新作は、「まとい大名」。



特

集

大切に育てたい「子どもの個性」

一人ひとりの可能性は無限大!

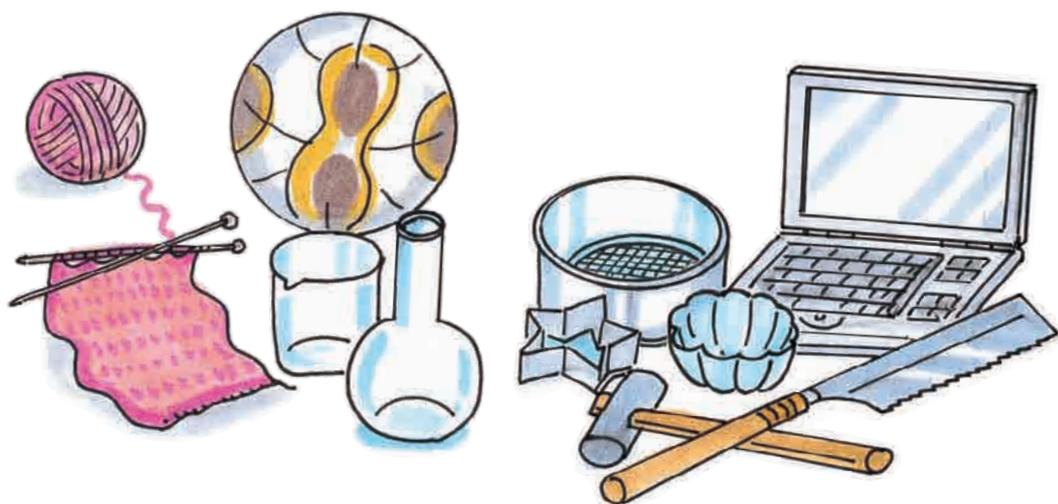
性別にとらわれず、その子の持っている個性を大切に伸ばしてあげたい。親なら誰もが願うことだと思います。

確かに、下のデータからもわかるように、最近では、大学の進学状況においては、女子の4年制(学部)への進学率が上がり、男女差はなくなってきています。しかし、専攻分野においては男女の偏りがまだまだみられます。

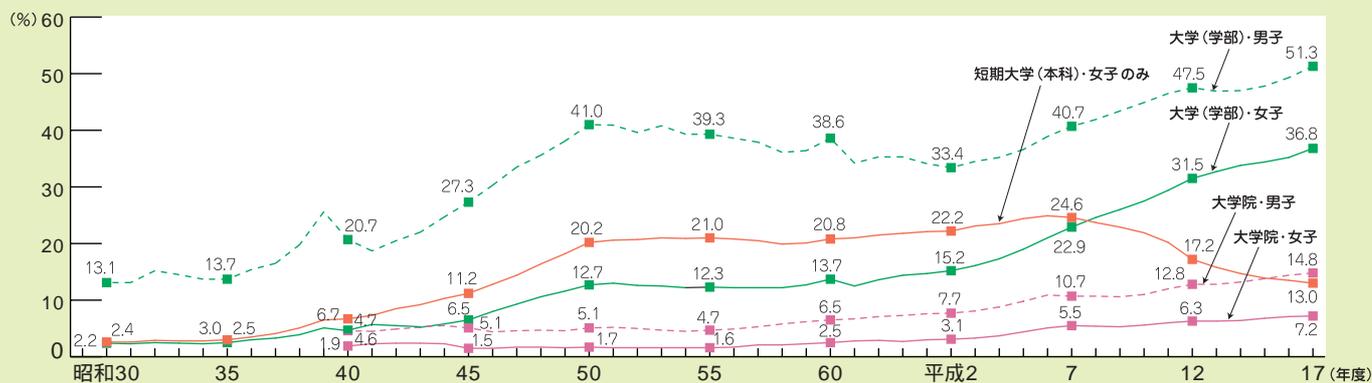
また、ある生命保険会社が行った「子どもの将来になりたい職業」の調査(平成17年)によると、女の子の1位は食べ物屋さん(2位保育園・幼稚園の先生、3位看護師・学校の先生・花屋さん)、男の子の1位は野球選手(2位サッカー選手、3位学者・博士)でした。

子どもの将来は、性別によって左右されるものではありません。大切なのは自分の好きなこと、得意なことを伸ばしてあげること。そして、将来、社会の中で自分らしさを発揮できることです。

今号では、そんな子どもの個性の育み方について考えてみました。



DATA 1 学校種類別進学率の推移



内閣府「男女共同参画白書」(平成18年版)より作成

子どもの可能性を広げる 環境づくりは、 家庭生活から始まる

神戸大学教授 朴木 佳緒留 氏



子どもには、将来、自分の好きな方面に思うがまま進んでほしい。親や先生たちは、皆このように願っているものでしょう。しかし、その大人たちが、子どもの将来を制限する要因になっていることもあるのです。

兵庫県の中学校では、希望する職業などを5日間体験する課外学習（トライやるウィーク）が行われています。その際、生徒たちは男女とも旧来のイメージどおりの「女性の仕事」「男性

しょうか。これからは、大人が旧来のイメージとは違うイメージを、子どもに見せていくことが大切です。

特に、家庭生活は重要です。最近では、さすがに「男は仕事、女は家庭」という考え方は少なくなってきました。しかし現実問題として、男性が長時間勤務を強いられるため、女性が家事を担っている家庭は多いでしょう。それを見ている子どもは、結果的に「仕事はお父さん、家事はお母さ

の仕事」を選びがちです。たとえば、消防士は「男性の仕事」だから、女子生徒は希望しにくいのです。

しかし実際には、女性の消防士もいます。にもかかわらず、男性の仕事だと思われているのは、大人たちが固定化された「女性の仕事」「男性の仕事」しか見せてこなかったからです。旧来の男女のイメージが固定化された社会では、女性も男性も、本来の自分らしさを発揮しづらいのではないで

んがするものだ」と思いこんでしまいがちなのです。

この思いこみが、社会全体に「女性の仕事」「男性の仕事」を区別する雰囲気を生み出していると思います。それは、「女性は将来家事をするのだから、仕事はほとんどしなほつがいい」という考え方にもつながっています。たとえば昇進したら、男性は周囲から祝福され、ますます意欲が湧くものです。しかし女性は、「忙しくて大変で

しょう」「あまりがんばりすぎないよ」などと言われることがあります。女性たちは、幼い頃からさまざまな場面でこのようなメッセージを受け続けています。そのため、自分でも「がんばりすぎては大変だ」と意欲にストップをかけてしまいがちです。

もちろん、出世することだけが良いことなのではありません。性別にかかわらず意欲や力を発揮できる社会が望ましいと思うのです。

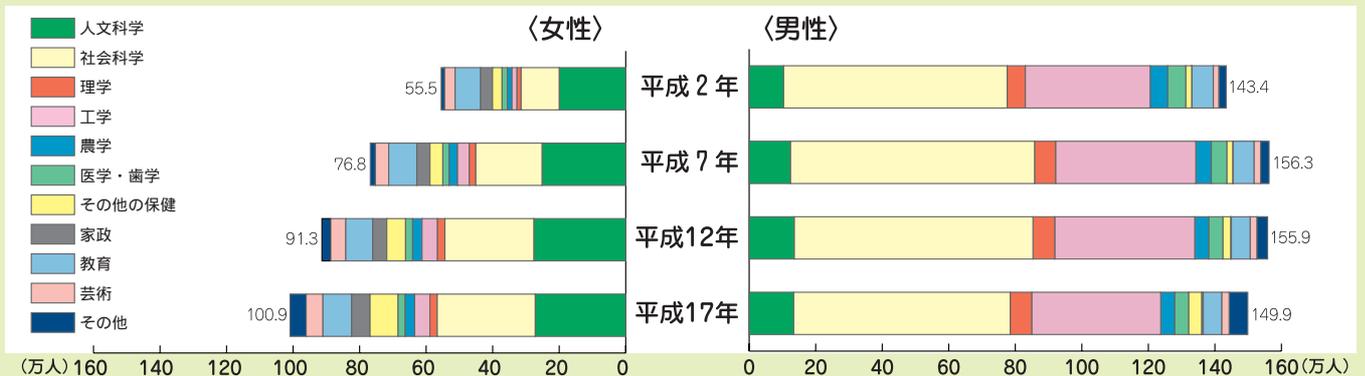
そのためには、まず家庭で男女が同じように仕事と家事を担っている姿を、子どもたちに見せることが大切だと思います。「女の子も男の子も同じように、やりたいことを存分にやっつけていいんだよ」などと、いくら口で言っても、態度で見せていなければ、子どもには伝わりにくいものです。

仕事が忙しくて家事ができない人は、「できなくて困っている」と率直に子どもに伝えてください。子どもと一緒に力を出し合う雰囲気になれば、「家族は協力しあつものだ」と理解できます。それは、男女がともに支え合う社会づくりにもつながるでしょう。

プロフィール ほおのき・かおる

神戸大学総合人間科学研究科教授、専門は教育学（男女平等教育、家庭教育史）。兵庫県男女共同参画審議会委員、伊丹市男女共同参画施策市民オンボード等、各種委員としても活動する。著書は「ジェンダーと教育の歴史」揺らぐ「学校から仕事へ」など多数。

DATA2 専攻分野別にみた学生数（大学の学部）の推移



内閣府「男女共同参画白書」（平成18年版）より作成

可能性を生かせる環境づくり

子どもの可能性を伸ばすために、教育の現場では、今、どのような取り組みがなされているのでしょうか。

中和小学校科学クラブのクラブ活動と、吾嬭第二中学校3年生の保育実習のもよう取材し、そのねらいをつかいました。

中和小学校
科学クラブ

「科学」を楽しく
体験できる実験に
子どもたちは
夢中です

中和小学校の理科室で、牛乳パックを手にした児童たちが、瞳を輝かせながら先生の話に耳を傾けています。今日は科学クラブの活動日です。

科学クラブは、4年生以上が全員入る必修クラブの中でも、人気のあるクラブの一つです。年15回の活動日には、女子5人、男子12人、計17人のクラブ員が集まり、さまざまな実験や自然観察を行います。

今日の実験は、「電気パン」作り。高さ10センチほどに切った牛乳パックにホットケーキの生地を流し込み、

内側面に沿って差し込んだ2枚のステンレス板にそれぞれ電気コードを取り付けます。電気コードのプラグをコンセントに差し込むと、2枚の板の間に電気が通り、生地が熱せられてパンができるという仕組みです。

先生から今日の実験のやり方と注意事項が説明されると、みんな待ちきれないように、一斉に牛乳パックを切り始めました。できた子から、ホットケーキミックスを入れて水で溶かします。

「ねーねー、これどのくらいドロドロでいいの？ このくらい？」

男子たちが自分の容器を見せながら尋ねているのは、クラブ長を務める6年生の女子です。

「科学クラブは、いろいろな物を作るのが面白そうだから、5年生のときから入りたいと思っていました。クラブ長も、やってみたいと思って立候補したのです。」

彼女は、先生が言ったとおりに作った自分の生地を、周囲の子たちに



先生が見守る中、電気パン作りに挑戦

見せてあげていました。

準備ができた子から順番に、電気プラグを取り付けます。すると、オーブンレンジも使わないのに、蒸気が出てきました。だんだんふくらんでくる生地に、子どもたちの目は釘付けです。最初にパンを完成させた男子は、出来たての逸品をほおばりながらこう言いました。

「科学クラブはいつも面白けれど、食べ物を作るときは特に楽しい！」

ふくらみ過ぎてあふれてしまった子もいましたが、みんな自分の作ったパンを満足そうに食べていました。

「次回は、電気プラグを作ります」

クラブ長の終わりの言葉に、児童たちは再び瞳を輝かせていました。



中和小学校
科学クラブ顧問
清澤 和人先生

実験の面白さで、科学を身近に感じてほしいと思います

科学クラブの活動は、物作りや自然観察など、自分の目や手を使うことが中心です。今の子どもは、ゲームなどで疑似体験をする機会が多いのですが、小学生のうちは、なるべく直接的な体験をすることが大切だと私は考えています。

中高生の理系離れが懸念されていますが、小学生にはむしろ理系は人気です。それは、実験が中心だからです。大きくなって難しい勉強に取り組むときでも、実験の面白さを十分に体験していれば、理科を身近に感じられるのではないのでしょうか。

また、一般に女子は理系に向いていないと言われますが、私が見る限り、そのようなことはありません。細やかな観察力や感性を持った子は理科向きだと思いますが、それは女子にも多く見られる性質です。

これからも、科学を身近に感じる心を育てていきたいと思っています。

ぞう組の子やまたちにコマ回しを教える中学生たち



「園児たちにとって、中学生はちょうど自分の10年後のモデルです。つまり、『自分が大きくなったら、お姉さん、お兄さんのようにになりたい』と憧れる対象なのです。だから、こうして触れ合うことは、この子たちが大きくなったときに、

吾孺第二中学校
3年生・保育実習
(八広幼稚園にて)

園児との交流は 新しい自分の発見に つながります

園児たちのワーツという歓声が園舎いっぱい響きわたりました。中学生のお姉さん、お兄さんたちが大勢やってきたからです。

吾孺第二中学校の3年生は、毎年1回、ここ八広幼稚園で保育実習をしています。今日は、3年2組の実

習日。33名の生徒たちは、二手に分かれて、それぞれ4歳児うさぎ組、5歳児ぞう組の保育室に入っていました。

お互いにあいさつをしてから、うさぎ組は折り紙を、ぞう組はコマ回しを始めました。好奇心むき出しではしゃぐ園児たちとは対照的に、中学生の多くは、やや緊張の面持ちです。幼稚園の先生の指示に沿って、恐る恐る園児に接しているといったようすがうかがえます。

しかし30分も経つと、生徒たちの表情がリラックスしてきたことがわかります。それぞれの保育室で、生徒と園児がはしゃぐ声が絶えず聞こえてくるようになりました。

八広幼稚園の園長、逆井弘子先生はこう言います。

『小さい子に優しくしてあげよう』と思うことにもつながるでしょう。そういう意味で、保育実習は中学生のためだけでなく、幼稚園児のためにもなると思っています』

園児たちに両腕を引っ張られていた男子生徒に、保育実習の感想を聞きました。

『小さい子と接したことがあまりなかったので、ここに来るまでは正直不安でした。でも、いざ一緒に遊び始

めたら、すごく楽しくて……』

また、こんな女子生徒もいました。「最初は気がすすまなかったけれど、だんだん可愛いなって思えるようになってきました」

14、15歳の子どもが幼児と触れ合う機会は、あまり多くはありません。わずか2時間の実習ですが、中学生たちが自分の新たな一面を発見することにつながる貴重な機会となっているようです。

は、中3という進路を考える時期に、もう一度自分を見つめ直してみる機会としても大切なことです。

中には、「やりたくない」と言う子もいるし、終わってから「やっぱりやだった」と言う子もいます。しかし多くの子どもは保育実習を楽しみにし、「また幼稚園を訪ねたい」と言っています。それは男女には関係ありません。その子の発達段階によるものです。

家庭科の授業でも、意欲や能力に男女差はあまり見受けられません。まだまだ家庭内で女性が負担する場面が多い調理や裁縫でも、男子もまったく抵抗なく取り組んでいます。家庭科が男女共習になってから17年ですが、その成果が表れてきたのでしょうか。



吾孺第二中学校
技術・家庭
(家庭分野)担当
加藤 智子先生

保育実習に取り組んで

吾孺第二中学校では、保育実習を学校行事の一環として取り組んでいます。保育実習に取り組む目的は二つあります。将来家庭人として保育に携わるとき、戸惑ったりすることがないように実際に経験しておくこと。もう一つは、自分がこれまでさまざまな人の手を借りて育てられてきたということを実感する場面を持つことです。これ

自治振興・女性課からお知らせ

男女共同参画社会実現をめざして
啓発冊子・ビデオを作成しました

区では、昨年4月に「墨田区女性と男性の共同参画基本条例」を施行しました。

この条例は、男女が性別にとらわれないことなく、それぞれの個性と能力を十分に発揮できる社会を築くため、施策を計画的かつ総合的に推進するものです。

この条例の主旨や目的をわかりやすく解説したビデオと冊子を作りましたので、ご覧になりたい方は、区役所5階自治振興・女性課または女性センター（押上2・12・7・111）、お近くの図書館等で貸し出し等をしていきますので、ぜひご利用ください。

啓発ビデオ「一人ひとりが自分らしく生きる」男女共同参画社会の実現をめざして
啓発冊子にじ特集号「墨田さん一家と考えよう」男女共同参画社会つてなに？」



にじ特集号

苦情調整機関がスタートしました

区内で発生した男女共同参画社会の構築を妨げる事柄について、区民からの苦情を受け付ける苦情調整機関をスタートしました。苦情調整機関では「苦情調整委員会」を設置し、申出内容を審査し必要に応じて、関係する区民等に、助言・指導・是正の要請・意見表明を行います。また、区の施策に対する苦情については、加えて是正勧告・改善意見の提案を行います。

〔事務局・問合せ〕

自治振興・女性課 男女共同参画推進担当（区役所5階）
☎5608)6512

苦情調整委員が決定しました

10月3日に区役所にて、区長より委嘱状を交付しました。3人の委員は男女共同参画に優れた見識を有する弁護士の方々です。



左から 守屋進氏、武山信良氏、委員長 中島美砂子氏

男女共同参画社会実現のための
シンポジウムを実施しました

10月28日（土）、墨田区役所すみだリバーサイドホールで、墨田区男女共同参画推進委員会と共催でシンポジウムを開催し、280名余りの方にご参加いただきました。第1部では、猪口邦子前大臣を講師に迎え、「あらゆる分野における男女共同参画」について講演を行いました。

第2部では、「男性も女性も子育ての喜びをわかちあうために」職場・地域・家庭の取り組み、そして私の取り組み」をテーマに、墨田区男女共同参画推進委員の渡辺英明氏をコーディネーターに、市川美香氏、長野和男氏、矢吹一夫氏、中島美砂子氏を登壇委員として、「仕事と家庭の両立、男女の子育てへの関与のあり方」「地域における男女共同参画」などについて、意見交換を行いました。



男女共同参画推進プラン進捗
状況報告書を作成しました

区では、男女共同参画施策を総合的かつ計画的に推進する行動計画「男女共同参画推進プラン」を策定し、様々な施策に取り組んでいます。このプランの進捗状況をまとめた報告書を作成しました。

区役所1階区民情報コーナーや図書館等にありますが、ぜひご覧ください。

男女共同参画に関する区民意
識調査を実施します

区では、「墨田区男女共同参画推進プラン」見直しの基礎資料また政策立案に役立てるため、6月7月頃にかけて区民意識調査を実施します。区民の皆様が毎日の生活の中で、どのような状況におられるのか、また、日頃男女共同参画についてどのように感じてもらえるのか等をお伺いします。アンケート用紙が送付されましたら、お忙しいとは存じますが、調査の趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

〔問合せ〕

自治振興・女性課 男女共同参画推進担当（区役所5階）
☎5608)6512

すみだ女性センターからお知らせ

女性センターはどなたでも利用になれます

すみだ女性センターでは、男女共同参画社会の実現に向けて、講座や講演のほかにも次のような事業を行っています。

男女共同参画関連の図書の貸出
(蔵書数約7000冊)や関連紙・雑誌の閲覧(18種類)

カウンセリング&DV相談(無料)
月・水・金曜、毎月第2土曜
午前10時~午後4時

要予約(5608)1772
施設の貸出(有料) ホール(約165人収容)、会議室1~3(約16~36人)等

4月以降の主な講座
お申込みは、4月以降の区報等でご案内します。

「すみだ大学」
今年で7回目となる「すみだ大学」は、女性も男性も「自分らしく生きる」社会の実現に向けて、仲間と一緒に楽しく学ぶ連続講座です。

昨年に引き続き男女共同参画の基礎的な知識と区政について学びます。19年度は5月~9月に13回程度開校します。男性の方の参加もお待ちしております。

オットマン倶楽部
夫・父・男:さまざまな立場の男性

主な事業及び内容

事業	内容
在宅子育て支援サービスの提供・調整	緊急一時保育、一時保育、児童養育家庭ホームヘルプサービス等の受付と子育て支援サービスの提供・調整
総合相談及びコーディネート	育成・養護・虐待・非行相談等を受け、相談内容に応じたコーディネート
地域活動促進事業	子育て支援ボランティアの育成・活用 子育て情報の発信及び施設の貸出し
要支援家庭サポート事業	児童虐待通報及び要保護児童等への対応 墨田区要保護児童対策地域協議会の運営

その他のお知らせ

オープンします

「墨田区子育て支援総合センター」
区では、在宅での子育てを支援する拠点施設として、平成19年4月に「墨田区子育て支援総合センター」をオープンします。
このセンターでは、緊急一時保育・

「問合せ」すみだ女性センター
墨田区押上2-12-7-111
☎(5608)1771

が集い、話し合い、新しい仲間をつくり、明日への元気を養う、そんな男性のためのサロンです。19年度は6月~7月に4回実施します。たくさんの方の参加をお待ちしています。

墨田区子育て支援総合センター



一時保育などの受付や子育て支援サービスの提供、育児や不登校、養護、虐待などのご相談に対応します。さらに、子育て支援ボランティアの育成や活用、子育てに係る地域活動を行う団体等への支援を行います(上表参照)。
また、地域の方々、ボランティア団体、民生・児童委員、児童相談所、警察等と連携をとりながら子育て支援に積極的に取り組んでいきます。

「施設概要」墨田区子育て支援総合センター(平成19年4月開設)
京島1-35-9-103
マーク・ゼロワン 曳舟タワー棟1階
「問合せ」子育て支援課子育て支援担当
☎(5608)6084

子育て等の相談窓口

未記入は月~金曜(年末年始、祝日除く)午前8時半~午後5時

子育て全般に関するさまざまなご相談にお答えします。

すみだ子育て相談センター	火~日曜	03(3621)1314
文花子育て相談センター	午前9時~午後6時	03(3616)0393
乳幼児子育て相談室(区役所内)		03(5608)6162
向島保健センター		03(3611)6135
本所保健センター		03(3622)9137

虐待に関するご相談にお答えします。

東京都墨田児童相談所	午前9時から	03(3632)4631
東京都児童相談センター	土・日・祝日、年末年始開館	03(3208)1121

不登校や学校生活、子育てに関する相談・助言を行います。

すみだスクールサポートセンター		03(3613)0127
-----------------	--	--------------



男女共同参画社会への

キーワード

▶ニート、フリーター

ニート(NEET)とは、Not In Employment, Education or Trainingの略で、就業、就学、職業訓練のいずれもしていない若年(15歳~34歳)の無職者のことをいいます。一方、フリーターとは、若年のうちパートやアルバイト(派遣を含む)および求職活動中の無職者(15歳~34歳)のことをいいます。特にフリーターは、平成2年の183万人から平成13年には約2.3倍の417万人にまで増えています(総務省「労働力調査特別調査」より)。

▶大卒の就職率

大卒者に占める就職者の割合は、ここ数年、回復傾向にあるものの、平成3年の81.3%から平成18年には63.7%まで低下しています(文部科学省「学校基本調査」より)。

▶定年退職者

いわゆる団塊の世代(1947年から49年に生まれた第一次ベビーブーム世代)が2007年以降、60歳となり定年を迎え始めます。仮に定年制度が60歳の現状のままなら、07年から10年にかけて全国で約700万人の定年退職者が出ると予測されます。

▶面接などで差別的な質問

雇用の分野における男女の機会の均等及び待遇を図る「男女雇用機会均等法」では、平成9年の法改正により、募集・採用・配置・昇進についての差別が禁止規定となっています。とはいえ、一部には、女子のみに「自宅通勤か」「なぜ総合職を選択したのか」などの質問をするケースもまだみられ、男子優先とする傾向は残っています。なお平成19年4月から新たな改正法が施行されます。

▶女性の能力の積極的な活用

職場での女性の能力の積極的な活用が進むなか、女性管理職の割合も徐々に増えています。平成17年の民間企業における女性管理職の割合は、係長相当10.4%、課長相当5.1%、部長相当2.8%となっています(厚生労働省「賃金構造基本統計調査」より)。



いるみたいね。

さくら 学生の中には、自分に合う仕事があればフリーターでもかまわないとか、自由な時間がほしいからって、あえて派遣を希望する人もいるみたい。

母 で、どうなの。やっぱり、就職はきびしいの？

さくら 先輩の話によると、ここ1、2年は就職率は伸びているみたいんだけど……。

父 景気も回復しつつあるし、定年退職者が多いこともあって、今年は新卒採用枠を増やす企業が増えていくようなだね。

母 といつても、女子の場合は大変なんじゃない？

さくら 法律で禁止されているとはいえ、現実には面接などで差別的な質問をされることもまだまだあるみたい。

母 そうなの。お母さんの時代にも「結婚後も働くつもりですか」なんて聞かれたものだけ。

父 でも、企業側の意識はだいぶ変わってきていると思うね。父さんの会社でも女性の能力の積極的な活用が進んでいるし、チャンスは平等になってきたよ。

母 そうね。お母さんのようなパートでもがんばれば主任になれる時代だもの。

太郎 そうだよ。おねえちゃんは設計という専門性の高い勉強をしているんだし、自信を持っていいよ。

祖父 太郎の言う通りだ。さくらにしかできない技術を身につければ道は開けるものじゃ。

さくら 私、うちみたいにならば世代家族が楽しく暮らせる家設計してみたいんだ。

祖母 ぜひ、我が家のリフォームもお願したいね。

太郎 ねえ、おねえちゃんの夢はゆっくり聞くとして、そろそろご飯にしようよ。

祖父 今日はおじいちゃん特製のコロッケじゃよ。

さくら あっ、私も食べたい！

母 あら、ご飯食べてきたんじゃないの？

さくら だって、おじいちゃんのコロッケおいしいんだもん。

全員 ではいただきます。

私らしく輝いて

働くお母さんたちの
役に立てることが、
何より嬉しいんです



家庭福祉員（保育ママ）
横田 俊子さん

「」の活動を始めてから、毎日嬉しいことばかりなんです。」「こう語るのは、区の「保育ママ」として活躍している横田俊子さん。」「保育ママ」とは、仕事などで昼間の保育が困難な保護者に代わって、自宅などに子どもを預かる制

度で、現在区で活躍している方は16名です。

「21年間、玩具問屋に勤めていたんですが、当時はまだ共働きは珍しい時代。二人の子どもを抱えて働くのは本当に大変でした。それで、仕事を辞めてから、何か働くお母さんの役に立つことがしたいと考えていたんです。区報で保育ママの制度のことを知った時にはこれだ！と思いましたね。」

現在は、空き家になっていた実家を利用して、平日の8時半から18時まで、スタッフとともに3人の子どもの保育を行っている横田さん。食事の世話やお昼寝、お散歩、洗濯など、忙しく動き回りながらも、遊びの時にはなるべくテレビなどを見せずに、童謡のCDをかけたリ本を読んであげたりと、工夫を凝らしています。

「自分の子育ての時は、どうしていたのか覚えていないくらい、とにかく毎日必死でしたから、子どもたちには可哀想なことをしました。それもあって、今はできる限り手厚く面倒をみてあげたいと思っています。大変なこともありませんが、子どもたちが毎日成長し

ていく姿や笑顔を見ると疲れも忘れてしまいますね。」

そんな中で、横田さんが一番嬉しかったことは、お母さんたちがいつか自分も保育ママの活動をやってみたいと言ってくれたことでした。

「お母さんたちに信頼されて子どもさんを預けてもらえること、そして自分も保育ママをやってみたいと思ってもらえるなんて、本当に嬉しい、幸せなことです。」

私が働いていた当時は、周りには「子持ちの人が何で働いているんだ」という冷やかな目で見られてくれず、困った時に子どもを頼めるのは母しかいませんでした。でも、夫婦共働きが当たり前になった今は、家庭だけでなく地域ぐるみで子育てしていくことが大切だと思っています。これから、もっともって保育ママの輪が広がっていけばいいですね。」



「何より事故が起こらないようにすることと、心と体を健康に、笑顔で楽しく子どもと接することを心がけています」という横田さん。